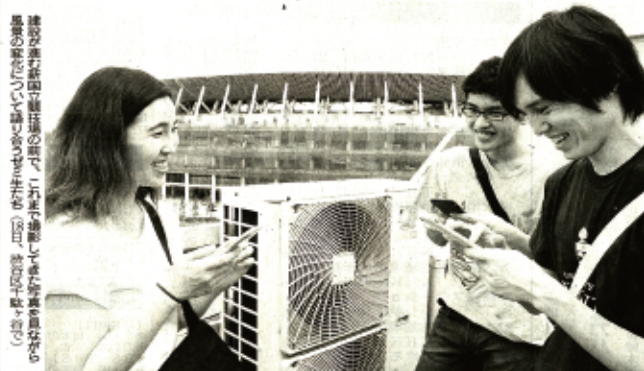


「新国立」変わる街 記録

2020年東京五輪の開幕まで、24日で残り1年。東京五輪・パラリンピックのメイン会場となる新国立競技場(建設中)では、東洋学園大(文京区)のゼミの学生たちが同競技場の完成までの記録を残すと定点観測を行っている。本体育工前の16年5月から定期的に工事現場を撮影しており、歴史的な「街並みの変化」を世に伝えようと、活動に熱を入れている。



大学生が定点観測 後世に伝える



定点観測を行っているのは、同大の建築学専攻教授(左)が指導する「現代都市文化ゼミ」の学生たち。スマートフォンでカメラで撮影を続けており、今月18日で観測は22回を数えた。

観測点に選んだのは、競技場近くの7階建てビルの屋上。2週間1度、ここから撮影しており、写真を撮れば、目出しになった立ちはだけ、外壁が徐々に出来上がっていく様子などが捉えられる。

定点観測は当初、同大の別の教授が「自国開催の五輪に際して、街の変化を感じてほしい」と企画したのが始まり。同大の前身・東洋女子短期大の学長だった愛知操一氏が1964年東京五輪で大会組織委員会理事を務めた経もあり、学生たちは入れ替わりながらも観測を続け、現在は建築学専攻のゼミの学生に引き継がれた。これまで計約40人の学生が活動に関わった。

建築学専攻によれば、64年大会の前は高度経済成長期で新鮮な高層建築の開通など「街並みの変化」が大きかったが、今回はあまり見られないという。事態は本番は東京が主役の舞台。

①2016年7月8日
本体育工前の建設予定地



②17年9月14日
クレーンが立ち並び、観客席も確認できる



完成目指して 工事現場撮影

※写真は東洋学園大提供



③18年1月18日
外壁が高くなり、競技場の全体像が現れる



④18年3月6日
外壁が更に高くなり、競技場の全体像が現れる

「新国立は街並みの変化を感じられる貴重な存在。定点観測により街づくりに貢献したい」と話す。

ゼミで学ぶ大3の山崎、大会中はもちろん、大会後の様子まで記録して冊子などにまとめる計画だ。